

史遊サロン通信

No.255号
平成28年
11月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井 宏

十一月は三戸岡さんの「不動産の秘話」

今年最後のサロン例会の月、形にとらわれない自由な会にしようと、講演や執筆も事前にお願ひすることなく、ただ日時と会場のみをお知らせする形でやってきた。

まだ、先行きに見通しを得たわけではありませんが、参加者も十数名、通信の原稿も十頁以上で、雑談形式での会合もいつも時間いっぱい、の盛況、史遊サロン後援の『著書出版』も六編ほど名乗りを上げて頂いている。サロンの性格から新規会員の勧誘は行っていないが、もちろん新たな参加は大歓迎。さて、今月は三戸岡道夫さんから「不動産の秘話」というお話が伺える予定である。三十年ほど前に、不動産会社の社長も四年間ほどおやりになった経験があり、

- 一、カラオケと不動産
- 二、海外旅行と不動産
- 三、巨大不動産の処分方法
- 四、海外不動産の扱い方

などについて具体例も含みお話されますので、録音・記録は遠慮して下さいとのこと。その他、サロン通信等に紹介された話題についても雑談したいと思ひます。

「三保」・「(旧)江尻宿」散策

中島 茂

三保は駿河湾に突き出た一〇キロほどの砂嘴で、古来名勝の地として知られ、二〇一三年六月「世界文化遺産富士山構成資産」として登録された。

JR清水駅前のバスターミナルから約三十分で「三保の松原入口」に着く。まず平安期からの古社「御穂神社」を参拝した。

ここから「三保の松原」までの約五百メートルは「神の道」と言われる。

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の十一月十九日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。なお、来年正月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の一月二十一日です。年末の「読書感想文」も例年通りお寄せ下されば一月号に予定します。

松並木には生まれた幅約三メートル、高さ約五〇センチの板の道は拭き清められ、歩いていると清々しい気持ちに満たされる。

「神の道」を渡りきると、目の前に「三保の松原」が広がっている。この日十月十五日は好天の土曜日とあつて、かなりの人でにぎわっていた。

松原に入つてすぐに「エレヌの碑」が目に入った。三メートルほどのシンプルな石碑で、表面に舞姫のレリーフが刻まれている。

エレヌ・ジュグリス夫人(一九一六〜五二)はフランスのブルターニュに生まれ、幼少から西洋舞踏に打ち込んだが、あき足らぬ思いをいだいていた。

やがて日本の能にめぐり合い、これが世界でもっともシンプルで完璧な演劇であることに心を打たれる。

能楽「羽衣」を題材に、第二次大戦直後のパリで創作舞踏を発表し好評を博したが、あ

いつぐ公演中、天女が天上に消えていく場面で倒れ、二年後白血病で世を去った。

夫のマルセルは妻の遺志を果たすべく、新聞社の極東特派員の職を得て来日し、一九五二年三保の松原に、地元の人々の暖かい協力を得て、妻の記念碑を建立した。

記念碑の下には夫人の遺髪が納められているという。

左脇を見ると、一メートル四方ぐらいの小さな石碑があり、短い詩が刻まれている。

三保の浦
波渡る風 語るなり
パリにて「羽衣」に
いのちささげし わが妻のこと
風きけば
わが日々の すぎさりゆくも
心安けし

マルセル ジュグリ

有永弘人訳

昭和59年10月13日
フランスフェア羽衣まつり実行委員会之建

訳者の有永弘人氏は、私が東北大学文学部に在学していたころ、フランス文学科の主任教授をされていた。

懐旧の想いにふけりながら、「羽衣の松」に歩を進めた。

現在の松は三代目、樹齢二〇〇年と言われるが、衰えも目立ち、平成二十二年に世代交代を果した。

静岡県は樹勢を回復させるために、地中に張った根の近辺に木炭を埋め込み、その隙間に宿る細菌の力を利用して松の養分吸収力を高める試みに着手する予定であるという。

駿河湾をのぞむ波打ちぎわに出ると、外人の観光客もちらほら目に入った。

伊豆半島の山波はくつきりと見えるが、富士山は薄雲にけむつてはつきりしなかった。

二十年ほど前、私は近くの清水南高校に在職しており、マラソン大会の生徒を見て、次の歌を詠んだ。

きさらぎの 光鋭き砂浜を

若き等走る 富士を彼方に

この日の三保の風景は今も忘れがたい。

雪をいたたく富士、駿河湾、伊豆半島の三者がきびしい冬の気のもとに見事に調和し、深い感動を覚えた。

遠い日々を回想しながら海沿いの遊歩道を歩き、三保の入口「西折戸」に出た。

このあたりは海水の浸食がはげしく、二十年前にくらべると海岸線がだいぶ食い込んでいる。護岸工事も三保地区の大きな課題の一つである。

西折戸からバスで約三十分「新清水」で下車、数分歩いて巴川のほとりに出る。

川はゆったりと川幅一杯に流れ、河口は清水港に通ずる。江戸時代清水湊は幕府の直轄領であり、巴川のすぐ東に展開した「江尻宿」と深い関わりをもっていた。

「江尻」とは巴川の尻(下流)を意味し、「江尻宿」は江戸時代の初期巴川の作る砂洲上にできた宿場町であった。

二キロに及ぶ江尻宿は商家、旅籠もとより、鍛冶町・鋳物師町・紺屋町などが並び、活況を呈した。

天保十四年(一八四三)には本陣二軒、脇本陣二軒、戸数一三四〇軒、人口六四九八人を数えたという。

しかし明治維新以降の時代の変動に揺さぶられ、太平洋戦争時の戦火で町並みはほとんど消失し、さらに高度経済成長期の新しい町づくりにともない、昭和四十七年には「清水銀座」と改称され、過去のなつかしい地名もまったく消えた。

いま「清水銀座」を歩いてみても、かつての宿場町を偲ばせるものは何も遺されていない。

今年六月末かつて「本陣」を営んだ寺尾家の子孫の方の尽力で建てられた「江尻宿寺尾本陣碑」が、往事を偲ぶよすがとなっているだけである。

それでも巴川のほとりに出て。ゆったりとした水の流れを眺めていると、水運に恵まれたかつての宿場町の繁栄が脳裏に浮かんでくるようである。

(平成二十八年十月十九日記)

出雲大社再考 (一〇)

近世最大危機佐太神社紛争 (2)

唯一神道 (吉田神道)

村上 邦治

古代での神道は、自然崇拜、祖霊崇拜が柱であった。律令時代以降、伊勢信仰が加わることが、平安期に入ると、仏教による影響を強く受け、「神もまた仏に救いを求める存在である」との考えから、「仏が主・神が従」とする「本地垂迹説」(天照大神の本地仏は大日如来、八幡神は菩薩など)が広まり、神仏習合が始まった。「両部神道」(真言密教の胎蔵界は内宮天照大神、金剛界は外宮祭神豊受大神)、天台宗と比叡山麓の日吉神社の神々(山王)を本地垂迹説に当てはめた「山王神道」などである。鎌倉期には、伊勢神宮外宮の神官度会行忠が「伊勢神道」を唱え、天照大神を祭神とする伊勢神宮の由緒を説いた。室町期に入り、吉田兼俱(一四三五〜一五一一)が、「反本地垂迹説」から、これまで

神道には「本地垂迹神道」「両部習合神道」「元本宗源神道」(唯一神道)の三種類あり、唯一神道こそ、天地開闢の混沌の中に初めて生じた国常立尊以来、天照大神、天児屋命(天孫降臨のとき、瓊瓊杵尊にお供をした神事の元締めで、卜の役目した中臣の遠祖)を経て、他教に混濁されることなく継承されてきた唯一純粋な神道であった。吉田家は

その天児屋命を遠祖とすることで、神道の最高位たる「神祇管領長上」を名乗り、正当性の裏付けとしたのである。神祇官の亀卜を掌る下級技術吏官に過ぎない吉田家が、神道の頂点に立つことができたのは、吉田兼俱が当時最も『日本書紀』に精通しており、神道を理論化し、始めて教説を完成させ、具体的な齋場所を設けたことであった。応仁の乱という混乱期に紛れ、遠祖を天児屋命とする偽の系図や、皇室の権威を利用した公的齋場を設けることで、唯一神道を確立させたのである。戦国期以降、吉田家は神道界の最高権威として認められていくのである。

寛文五年(一六六五)江戸幕府は、「諸社禰宜神主法度」(神社御条目)を制定、神職統制の基本とした。この中で、伊勢神宮や京都の有名神社を除き、神職の位階について

は、吉田家の神道裁許状を必要と定めたことで、全国の神社・神職を統轄することになったのである。この御条目は、公家との関係をもたない多数の諸社神職にとっては、吉田家に依頼すれば事足れることになり、都合はよかった。

伊勢神宮に並ぶと自負する出雲大社は、このままでは吉田家の支配下になる事を恐れ、古来から出雲国造は、惣檢校職を兼ねて、出雲国内の神社を祭ってきたとし、これまで通り恒久的執行権を、朝廷に願い出たのである。寛文七年靈元天皇から「永宣旨」を下賜され、当社に限って、他家の支配を受けることなく、万事国造の処理に従うことが、これにより保証されたのである。

佐太神社は神社御条目に定められ、幕府に認められた吉田家を頼り、一方大社は天皇からの宣旨を以て、これに対抗したのである。

こうして両社の訴訟は、幕府対朝廷の様相をみせることになったのである。

(この項続く)

一元官幣大社・正一位勲一等一
越前国一の宮 氣比神宮の謎

諸橋 奏

越前国一宮 氣比神宮は福井県敦賀市曙町にある。主祭神は伊奢沙別命。

「氣比」(筥飯)の初見は、日本書紀卷六(垂仁天皇)に、崇神天皇の世に、「額に角有る人、一の船に乗りて、越国の筥飯浦に泊れり」で、「何の国の人ぞ」の質問に「対へて日はく、意富加羅国王の子、名は都怒我阿羅斯等、亦名は宇斯岐阿利叱智干岐と曰ふ」とある。「つぬが」から「敦賀」が)

このことから、崇神天皇の時代すでに筥飯(氣比)と呼ばれ、食物に深くかわりがあり、良港で異国人が渡来し、その文化が伝来していたことが窺える。

朝鮮半島と日本海沿岸の国々はかなり早い時代から日本海を内海として交流があったことが知られている。

朝鮮半島南部と本州の中国地方西端・北九州地方は朝鮮海峡を挟んで指呼の間である。ただこの海峡の日本海沿岸には対馬海流が、朝鮮半島南東沿岸には東鮮暖流が北上している。

古代、海流の影響は多大であった。東シナ海を南から北上して来る黒潮は南西諸島の北で列島の太平洋側を東北に流れる黒潮と日本海側に入る潮流とに分れる。日本海に入った対馬海流には三つの流れがある。山陰から北陸沿岸を洗うもの、隠岐西で分れ佐渡で合流するもの、朝鮮半島南部沿岸から日本海中央部を東へ、男鹿半島で合流するものである。この海流に対応して航海の安全祈願の神社が。

対馬国一宮は海神社、隠岐国一宮「由良比女神社」の元の名は「和多須神」、佐渡国一宮が「度津神社」と古代海上交通の要所に海神がまつられている。

更に弥生時代を象徴する稲作の神についての説話にも海流が深くかわっている。

石見国の佐比売神話は、佐比売(ちび姫・乙子狭姫・種姫)水の神・農耕の神)の家に旅の神が泊り、母親の大宜都比売(穀物の神)が、身体からいろいろな食べ物を出してもてなしたところ、旅の神は失礼だと怒り、大宜都比売を斬ってしまった。死に際し母神は狭姫に「形見の品を持って東の国へ行きなさい」といつて亡くなった。ちび姫は母の身体から出てきた「馬や蚕、大豆、稲、麦、小豆など」を持って、かわいがっていた赤い羽根の雁の背に乗り「青い海の上を東の國を目ざ

して飛んで」大島(益田市)や狭姫山(益田市比礼振山)など石見西部を経て、東部大田の三瓶山(一一二六メートル)に降り立った。こうして石見一帯に豊かな実りをもたらしたといわれている。

続いての丹波国の神話は有名である。

『丹波国風土記』(残欠)によれば「丹波というわけは、昔、豊受大神が伊去奈子嶽(磯砂山・六六一メートル)に天降られた時に、天道日女命(饒速日命の妃)等が大神に五穀および桑蚕等の種を求められた。そこで、豊受大神はこの嶽に真奈井を掘り、その水をそそぎ田畑を作り種を植えられた。秋には八握りもある穂がたれて実に快かった。豊受大神はこれを見て大変歓喜され、あなにえし田庭(立派に実った田庭である)とおっしゃり、再び高天原に登られた。ゆえに田庭というのである」と。

序でながら、古代、丹後はもともと古代丹波の大国であったが、元明天皇の和銅六年(七一二)に旧丹波国から五郡(加佐郡、與謝郡、竹野郡、丹波郡(現中部)、熊野郡)を割いて丹後国(たにはのみちのしり)と命名されたものである。

氣比神宮の地理的な条件を見ると、朝鮮南部から青い海を対馬海流にのって山陰から沿岸を東に進むと奥丹後半島をめぐって若狭湾

に入る。湾の西の奥には丹後国一宮籠神社が、湾中央部には若狭国一宮若狭彦神社が、そして東奥の行きどまりに、越前国一宮気比神宮が鎮座している。「日本海の海岸線が敦賀で東西性が南北性になるところに位置している」のである。かかる地勢にあることから、西の朝鮮からの渡来人もその文化もこの地に定着することになったのが敦賀ということである。

気比神宮の「土公」(周囲に卵形の石を八角形にめぐらした盛地)は筍飯大神が背後の神体山天筒山からここに降臨した聖地であるという。謎といわれているが、籠神社の豊受大神の神話と類似の水田稲作伝来説話につながるものであろう。

なお、海神の「ワタ」、若狭の「ワカサ」は朝鮮語であるという。扱て、改めてなぞ多き気比神宮について考察すると。

まず、その社名「気比神宮」。気比は筍飯で、筍は食物を盛るうつわ、飯は「めし」。食を食というのは筍が転じて食物・食事になったもの。従って気比大明神、筍飯大神、御食津大神は同じ神のこと。更には宇迦之御魂神、豊受大神(ウカはウケの古形で食物)、大宜津比売神、保食神など、その性格上、同一神と考えられている。五穀をつかさ

どる食物神のことである。気比(筍飯)大神の神名は「名は体(実体)を表す」の言事(言葉と出来事)通り、水田稲作の伝来、定着を物語っているのである。

次いで主祭神「伊奢沙別命」。気比神宮はかつては筍飯宮とよんで新羅の王子天日槍を伊奢沙別命としてまつっていたという。

言語学者の金沢庄三郎教授(一八七二〜一九六七)によれば、「宇佐神宮の宇佐のサ(佐も新羅の原号であったソ、すなわちその「民族名ソ」から出たとあるように、この伊奢沙別のサ(奢・沙)もまた、天日槍がそこから渡来したとされている新羅のそれからきたものだったからである。」(金達寿『日本の中の朝鮮文化5』)。というわけで伊奢沙別(別は古代の姓)は新羅渡来の氏族のことを指すとみるべきであろう。

当然に胆狭の太刀をもつて渡来した天日槍(但馬国一宮出石神社祭神)のことでもある。またそれは崇神朝に筍飯浦に上陸した、額に角有る人意富加羅国王の子、都怒我阿羅斯等と同日定しているようである。角鹿は胄のことと思われる、イササの太刀とともに武器や鉄製品の伝来を物語るエピソードである。

祭神については主祭神伊奢沙別の他に、神功皇后はじめ六柱が合祀されている。気比神宮

に縁の深い神々といわれ、日本武尊一仲哀天皇一応神天皇は親子、仲哀天皇と神功皇后は夫婦であり、神功皇后と王妃命は姉妹の関係にある。武内宿禰命は仲哀天皇夫婦に仕えた重要人物。

伝承によれば気比神宮と仲哀天皇・神功皇后とのかわりは、仲哀二年正月、氣長足姫尊を皇后とした仲哀天皇は二月、角鹿に行幸し行宮(筍飯宮)を建てて住居とした。三月の熊襲征伐には神功皇后は仲哀天皇の命で、敦賀から出発して豊浦津へ。

所で神功皇后の神話については、「三七二年、百済の肖古王、倭に使者を送り、七支刀などを贈る」(新訂『日本の歴史』総括年表(1)、朝日新聞社編)と「三六九年、倭、朝鮮に出兵、半島南部を勢力下に置く」(『日本の歴史事典』山田美佐子編・大創出版)とを軸とした私見・神功皇后年譜は次の如くである。(謎の四世紀後葉)

三六一年 仲哀天皇元年。
三六二年 氣長足姫尊、皇后になる。
三六九年 二月、仲哀天皇急死。

九月、神功皇后三韓遠征を行う。

帰還後の十二月、後の応神天皇を筑紫で出産。摂政を行う。

応神天皇の異母兄、麿坂王と
忍熊王を討たせる。

三七二年 百済が七支刀(三六九年紀年銘)
を献上する(実際には三七一年
とも)

三八九年 崩御。(参考『知っておきたい
日本の神話』武光誠)

一方、氣比神宮の神社界における社格を検
証すると「官幣大社」は社格筆頭、「正一位
勲一等」の神階(神位)は畿外最高位、更に、
明治二八年、「神社から神宮に昇格(二四神
宮号)」と古代から歴代の皇室の尊崇なしに
はなり得ない全国八万社の頂点に位置すると
いつても過言ではない。

既述の如くかつては地方神よりも国家神と
してその神威があり、しかも古代、大陸と朝
鮮半島からの高度の文化の受皿となつてこれ
を琵琶湖経由で逸速く畿内にもたらした功は
甚大だったことがみえてくるのである。しか
しこれらの功績とは別に、皇室にとって特別
の事情があつたことも窺える。
三世紀末から四世紀に成立した初期ヤマト
政権の支配者の性格は、多分に呪術的なもの
であつたと古墳の副葬品から考えられてい
る。

仲哀天皇は、神功皇后に託つての「新羅征
伐の神託」を疑い「神の言」を用いなかつ

た崇り(神が人をとがめるために下すわざわ
い)で急死する。

また、その直後、神功皇后の命を受けた武
内宿禰は皇后の御子応神天皇の異母兄である
麿坂王と忍熊王とを討つ。麿坂王は「赤い
猪」に食い殺され、忍熊王は欺かれて逃げ場
を失い「自分は(偽りの言葉信じて)だまされ
た。」と「水に潜つて」瀬田の渡りに憤
死。

日本民族はその形成以来、自然の理法・目
に見えないカミのはたらき(惟神の道)を尊
崇する精神文化を中心として生活してきてい
たが仲哀天皇はそのカミの託宣を疑い、無視
した咎めを受けたということであろうし、神
功皇后の、応神天皇の異母兄殺害は、人倫の
道に反することとして咎められるべきことで
あつた。この非業の最期を遂げた人々の怨霊
は、まず丁寧に祀り、神として崇めうやまう
しか、その崇りを鎮める法がないことから、
以後の王権がその慰撫に腐心した結果が今に
みる「氣比神宮」の社格名に残っているわけ
で、古来の日本民族の心の奥を垣間見せてく
れているということであろう。

なお、この社格制度は昭和二十年(一九四
五)十二月に、占領軍(GHQ)から出された
「神道指令」によつて廃止された。が、社格
名だけは旧称として今でも使用されている。

(『神社の基礎知識』高見寛孝)

〔参考文献〕(本文中に明記した一部を除く)

『日本書紀』巻第五く巻第十(神社新報社)
『日本書紀(上)全現代語訳』宇治谷孟(講談
社)

『日本の歴史』総括年表(1) 朝日新聞社編
『新編日本史』朝比奈正幸他(原書房)

『一宮巡拝の旅』入江孝一郎(みくに書房)
『日本廻国記一宮巡歴』川村二郎(講談社)

『諸国一宮と謎の神々』新人物往来社
『日本の中の朝鮮文化3・5』金達寿(講談
社)

『週刊神社紀行40』(学習研究社)

『古代の日本海文化』藤田富士夫(中央公論
社)

『ここまでわかった「古代」謎の4世紀』
『神社の古代史』

『歴史読本』編集部編(KADOKAWA)
『知っておきたい日本の神社』武光誠

(角川学芸出版)

『神社の起源と古代朝鮮』岡谷公二(平凡社)
『日本の神様のすべて』橋詰久史編(宝島社)

異端

平山 善之

日本では、秀吉の時代から明治初年に至るまで、キリスト教が禁教とされ、弾圧を受けたことはよく知られている。だが、仏教の一派が、同様に禁教とされ、発見されたい死罪・島流し・入牢等の咎めを受けた、という事実はあまり知られていない。

それは、日蓮宗の「不受不施派」といわれる宗派で、ある研究者によれば、江戸期に処刑されたものは、磔刑、斬刑、牢死、自害、断食等、人命を失ったもの百五十六人、島流し百八十一人が数えられるという。(影山堯雄「日蓮宗不受不施派の研究」) 入牢者の数はこれに数倍するであろう。その苛烈さは、キリシタンのケースとさほど変わらない。

キリスト教が為政者の政策上の理由で弾圧されたのは、わからなくもない。日本の従来からの神仏という多神教と全く異質の一神教でもあった。島原の乱も起こしている。

しかし、長年日本人に親しまれてきた仏教の一派が、いかなる理由で禁教とされたの

か、誰がそう決めたのか、興味のある問題である。この問題について、考えてみたい。

一

宗教というものは、すべて自分たちの教義が唯一正しい、他宗はインチキだ、というものである。

古今東西の宗教をみるに、一神教は排他性が強い。ユダヤ教、キリスト教、マホメット教などは古代から現代に至るまで激しい抗争を繰り返してきた。同じ宗教の中の派閥争いとなると更に激しく、キリスト教の新旧両派の争いは近代に至って漸く終息したが、マホメット教のシーア派・スンニ派の争いは現在も毎日のニュースに登場する。

多神教はギリシャ、ローマに見る如く寛容である。また、仏教も、他の宗教に比べれば、最も寛容な宗教といえよう。

しかし、仏教といえども中には、他派に対して攻撃的な宗派もある。日蓮宗は、仏教の中では排他性が最も強いのではなからうか。日蓮宗には「四箇格言」という言葉がある。

「念仏無間 禅天魔 真言亡国 律国賊」

(諫曉八幡抄)

念仏は無間地獄に堕ちる業因である、禅は天魔の行為である、真言は亡国の原因であ

る、律は国の賊である、として浄土宗や他宗派を攻撃した。

日蓮は鎌倉時代に比叡山で修行後、法華宗という新しい宗派を興した。先行する浄土宗、禅宗、真言宗、律宗、などの差別化のために、それらがいかに間違っているかを強調せざるを得ず、勢い激しい言葉を用いたものであろう。また教義面からみても、先行各派が自己一身の魂の安楽を願う、来世指向型であるのに対し、日蓮宗はこの世をよくするためにどうしたらいいかという現世指向型という違いがあるように思う。折柄の元寇の危難に「ひたすら南無妙法蓮華経を唱え、国家あげて法華宗に帰すれば救われる」と辻説法をした。

日蓮宗はどうしても政治性がつよくなる。日蓮の「立正安国論」は時の政権に、かくあるべし、ということを説いている。諫曉と云って、常に為政者に説教してきたのが、この宗派の特徴である。(今日、創価学会が公明党という別働隊を使って政治に関与しているのは、この伝統によるのであろう。)

この為、他派との争いは、格段に多い。為政者も何度も手を焼いて、双方を呼び出して宗教論争をやらせて、黒白の判定をくだして

きた。とりわけ浄土宗との喧嘩は度々で有名なものでは信長の「安土争論」(一五七九)、家康の「江戸城争論」(一六〇八)がある。いずれも日蓮宗が負けているのは、判定者も日蓮宗の強引さを面憎く思ったのであろう。

二

こうした攻撃性の強い姿勢は、同じ日蓮宗の内部の対立抗争との場合も、他宗にない苛烈な様相を呈する。そして、日蓮宗という宗派は、他宗以上に内部抗争の火種が多かった。

日蓮は武蔵の池上で没する直前、六人の高弟に後事を託した。六人は「不次第」すなわち順不同、上下なしとした。六老僧或いは本弟子という。この六人は各人が各地で弟子を養成したから、自然に派閥をなしていった。これをそれぞれの「門流」という。また、教義上も、法華経の解釈や読経の仕方をめぐる相違が生じて対立する。「一致(勝劣)の争いという。

更には、東西の反目もあった。日蓮没後、孫弟子日像が京都にはいり、説教に努めて以降、特に室町時代に入ってから爆発的に教勢が伸張した。京都では町衆と呼ばれる商工業者階級、芸術家、芸能者が社会的地位を高

め、大きな勢力となったが、彼らが日蓮宗の現世指向型の教義に共鳴したためであろう、下京区を中心に日蓮宗だけで二十四もの本山を擁するほどになった。これは、関東にいる信徒から見るとあまり快い話ではなかったであろう。日蓮は上総の出身、六老僧は皆関東で活動して死んだが関係寺院も多い。東西の対抗意識なども潜在したと思う。そして、これらの対立をバックに「不受不施問題」が大きくなってくる。

三

四箇格言を標榜する日蓮宗は、他宗派の者からの施しは受けない、他宗派への施しはしない、としてきた。これが「不受不施」ということである。

日蓮宗がまだ広がらず、教団が小さな頃はそれも良かった。しかし、次第に大きくなり、付き合いが広がると不都合がでてきた。上流階級、貴顕と交わるようになる、京都の本山寺院の主には藤原家や足利家の出自の僧侶もでてくる。天皇の勅願寺になったりすると、当然、信徒ではない貴人から供養(接待や施し)がある。これを受けるか、受けないか。將軍家の法事のように、宗派の掟だから、出られませんと言いつれ切れない場合が出て

くる。室町時代、將軍家の祖先供養に招かれた際に、宗派の掟を理由に辞退し、聞き届けられた例もある。

弱い権力者であればそれも出来た。しかし、強い將軍が、「幕命にそむくか」と言い出したら、教団が潰されるおそれがある。そこで、王侯除外制という理論が生じてきた。一般的には駄目だが、国主から言ってきたら、その時は受ける、というご都合主義、長いものには巻かれる、というものだ。当然、内部から反対が生じた。「国主も一般庶民も仏法の前には同列で特例を認めるべきではない。」という不受貫徹主義である。そして、自分たちが日蓮の教えを正しく伝える正統派であると主張する。

文禄四年(一五九五)九月、豊臣秀吉は京都東山妙法院(方広寺)大仏の千僧供養を営むにあたり、日蓮宗にも各宗と共に出仕するよう命じた。京都の日蓮宗諸寺は大騒ぎになったが、結局大勢は王侯除外を楯に、受けた。ひとり反対したのが妙覚寺の日奥であった。

後に日奥は大坂城へよびだされ、不受不施派の日重らと対論をした。これが、公式の場における受・不受の対決の始めである。大坂城

対論(一五九九)という。これは秀吉の死の翌年である。大老徳川家康は、日奥を説得し妥協案までしたが従わなかったので「公儀の命に背いた」として日奥を対馬へ流罪に処した。

日奥は、十三年後赦されて京都に帰り、引き続き「不受不施」を唱え、従う者も多かった。

四

徳川幕府の宗教政策は、仏教各派に、総本山を置き、総本山をして派内を統率せしめる、というものであった。この支配体系は浄土真宗のように宗祖親鸞の血統を引く者が統率している宗派はいいが、日蓮宗のような集団指導型宗派は激しい総本山争いとなり、その中で幕府が総本山と認めたのが身延山久遠寺である。

久遠寺はそれまでは関東諸本山の一つに過ぎなかったが、この結果日蓮宗全ての触れ頭となり、諸寺はその統率に服することになった。池上本門寺、中山法華経寺、小湊誕生寺などにしてみれば甚だ面白くない。この頃身延山久遠寺の法主、二十一世日乾、二十二世日遠は京都本満寺出身であったから、東西の対抗意識も働いたのではなからうか。

本満寺は大坂城対論の日重の寺、不受不施派の首魁である。しかし、江戸や関東の諸寺・信徒は不受不施を信奉するものが多かった。大体、田舎のほうが純粹なものである。

総本山として宗派内を統率していく為に、身延山としては、不受不施派をなんとか退治しなければならぬ、関東の大きな寺を自派のもので掌握しなければならぬという焦燥感にかられてきた。統率がうまくいかなければ総本山失格としてその地位を失う。

理論から言えば不受不施のほうが日蓮宗の正統といえるし、民衆にもわかりやすい。身延山久遠寺の取った策は、幕府を動かし、公権力を以て、押さえつけようというものであった。かつて、家康が日奥を流罪にした事実をあげ、「大権現様の決定されたこと」として不受不施派は異端、邪教であるというのである。そこで幕府要路に猛烈な運動を始める。

幕府当局としては、「不受不施問題」などという教義に関することには関与したくない、という気分であったことは容易に察せられる。大名や幕閣にも法華の信徒は沢山いるし、不受不施を是とする者も多い。家康とて

教義の是非を判定したわけではない。命に従わないから罰したまでである。

慶長七年(一六〇二)伝通院(家康の母)の葬儀に日蓮宗の関東諸寺は小石川の壽経寺で諷経、供養は受けなかった。

元和二年(一六一六)家康の葬儀に日蓮宗関東諸寺は武州仙波喜多院で諷経したが、供養は受けなかった。

元和九年(一六二三)十月、將軍秀忠は、永代、不受不施公許の御教書(折紙)を、京都所司代板倉伊賀守勝重を通じて下した。

寛永三年(一六二六)崇徳院(家光の母)の葬儀に日蓮宗の関東諸寺は増上寺で諷経し、池上本門寺、中山法華経寺らは供養は受けなかった。身延山久遠寺は受けた。

これらの例は幕府当局の空気をよく表している。しかし、慶安四年(一六五一)家光の葬儀になると、従前のように、供養は受けないが諷経したいという願いは許可されなかった。おそらく受派側が懸命に運動して阻止したものでらしい。

五

身延山の幕府への働きかけは猛烈であった。

寛永元年、身延山二十一世日乾は秀忠の御教書破棄の訴訟を起こしている。翌二年本満寺の日暹(にっせん)が不受不施派を訴えたというが、寛永五年になると、この日暹が身延山二十六世となった。同六年二月、日暹は池上本門寺の日樹を寺社奉行に訴えて了。日乾・日遠・日暹と三人の新旧身延山法主(いづれも本満寺出身)は江戸に滞在したまま三年、本門寺攻撃、不受不施禁制訴訟を続けたらしい。(「身延山史」)この頃、身延山とい

えども、不受不施は一般的には守る、王侯だけ例外を認める、というものであったから大差はないのである。従って、「身延対反身延」の抗争といった趣があり、関東の庶民は反身延派が圧倒的だったらしい。身延としては、これを何とか「公権力対不受不施派」という構図に持っていきたいわけである。錦の御旗は「権現様のお裁き(大坂城対論)」である。

幕府も放って置けなくなったのであろう、ついに身延・池上両者を呼び、対決させることになった。

寛永七年二月二十一日、「身池対論」は酒井雅樂頭邸で、酒井以下年寄りと、判者として天海(天台宗)・崇伝(禪宗)他、両派か

らは池上の日樹・身延の日暹ら各六名出席して行われた。この記録は二本あり池上本では本門寺側が、身延本では久遠寺側がそれぞれ勝ったとしており、真相不明である。後世書かれたらしい徳川家の公式記録では、身延山久遠寺の勝利としているが、これは寛文の禁制以後書かれたらしい。(宮崎英修「禁制不受不施派の研究」)そして、この日、理非の裁定は出されなかったらしい。双方が勝った、と称していた。

三月四日、小石川伝通院で家光の姉(京極若狭守妻)の葬儀があり、日樹、日暹共に読経したが、布施は受けなかったという。これにも勢いを得て日樹は三月二十一日、寺社奉行に身延処断を訴えて出ている。

三月二十六日と二十九日の両日、江戸城西丸で両者の審問があり、四月一日、判決があったがその内容は、日樹は上意違背の罪で伊那へ流罪、中山、小湊以下の諸寺住職も国内各地に流罪というものであった。

この判決は、教義の理非は判定せず、身延の総本山としての指揮権を認め、これに従わない、ということ日樹ら六人の僧を追放処分にしたものらしい。追放された寺には身延から後任が送り込まれた。

身延山は形式的には勝利を収めたのである。思うに、不受不施派は対論の勝利を確信し、なんら手を打たなかったのに対し、身延側は懸命の裏面工作をおこなったらしい。

一つには、支援者である。身延にはお万の方(家康の側室。頼宣・頼房の母)の縁で、紀州・水戸の徳川家が身延山の後ろ盾であった。二つには新旧三人の身延山法主が江戸にはりついていたので、それぞれの人脈を駆使して自派の為に働きかけたであろう。第三に、これはまったくの推量であるが、相当のカネも使ったにちがいない。

大体、幕府にとりどちらでもいい問題である。日蓮宗があげて不受不施だといって、葬儀や法事に出てこない、というなら問題だが、日蓮宗としては、出てきて命令に従っているのだから、あとは宗派内の統率の問題として「関与せず」でも良かった。

こういう時、手ぶらで頼みにいくわけにはいかない。身延山は要路のあちこちに相当の賄賂をばら撒いたであろう。

ところが、関東では、末寺に至るまで圧倒的に正統不受不施派がつよく、身延のいう「王侯除外論」を受け付けけない。身池対論の結果は身延が勝ったとしても身延としては、

終わらない。池上本門寺などは、身延山に誓紙を出して服従したが、今度はその末寺が従わない。強行すれば僧は寺を出て庵を結び、檀家はみなそちらへついていく。不受不施派を禁止して、末寺を受不施に転向させなければ、第一、本山の経営が立ち行かないのだ。その禁止を公権力に頼らざるを得ない。

同年六月七日、身延の三人(日乾・日遠・日暹)は揃って將軍家光に会い、不受不施派の全面禁止を訴える。しかし、望む結果はえられなかった。

身延は引き続き禁止発令を求め、幕府の要路に運動を続けた。

六

身延山が目的を果たすのは、二十八世日奠に至ってからである。

二十六世日暹は慶安元年(一六四八)没し、二七世日境が後を継いだ。承応元年(一六五二)日境はなお身延に従わない中山法華経寺ら不受不施派の五寺の住職を訴え出ているが、以後毎年のように、多い時は年に数度、訴えを起こしている。日境が死ぬと跡を継いだ日伝(後に日奠)が訴訟をくりかえした。

日奠は寛文七年に没するまで八年間在位したが、そのうち三年は江戸に詰っていたとい

う。日奠の頃になると、身延山は一般人の不受も変更し、「貰うものは貰う」という完全な「受不施」論を取るようになったらしい。寛文五年(一六六五)、身延山の日奠が躍り上がって喜ぶ事態が起きた。

幕府は全国の寺社に「朱印状改め」を下令する。この頃、俗界でも領地争い、境界紛争が多発していたためか、寺や神社の所領についてもこれを調べ直し、改めて朱印状を発行する、というのである。

大名や幕府が寺領を寄進するのは、供養である、という論理に基づけば不受不施派はこれを受けられないはずだ。朱印状を受ける時、請書を出させ、その中に、「供養として頂戴します」という文言を入れるようにすれば良い。身延山は請書の文案まで作成したというから、朱印状改め自体が身延の考案かもしれぬ。

老中久世大和守から、「朱印状下賜は供養である」との申渡しを受け不受不施派は割れた。

「受け取らない」という純粹派と、「いや、寺領は仁恩として下されるものとして、受け取る」という妥協派である。後者を非田不受不施派という。

ともあれ、これで「身延対反身延」の抗争を、明確に「公権力対不受不施派」という構図に代え得る。朱印状を貰わずに寺を続ければ「お上に楯突く不届きもの」となる。

七

更に決定的な打撃は「寺請禁止」であるう。

寛文九年(一六六九)四月三日、幕府は新たな禁令をだした。

「公儀え書物を致さざる不受不施派之日蓮宗寺請に取るべからず。町中五人組切に立相、これを改め、借屋たなかり、借地者は其地主よりこれを改め紛れなき様に檀那寺と引合せ吟味塚まつり寺請状を取申べき事 以上」

書き物致さざるとは、非田派のこと。寺請とは、檀那寺が発行する身分証明書で、今後不受不施派の寺の寺請状は認めないというものである。寺は行政組織の末端として機能していたが、不受不施派の寺からはその機能を取り上げたのである。これも、身延山から、再三、執拗な働きかけの結果であろう。

寛文五年以降、急転直下に幕府が関与したについて、この年、加賀爪甲斐守直澄という旗本が寺社奉行に就任、身延山に賄賂で籠絡

された結果だと見る人が当時から多かつたそうである。

甲斐爪に吹きたおさるる不受不施は

流るる水のあわとこそなれ

加賀爪にかきやぶられし法華宗

いたやかいやといふは不受不施

などという落首が江戸市内に出されたという。(「禁制不受不施派の研究」宮崎英修)

加賀爪甲斐守は寛文五年から十年まで寺社奉行の職にあったが、十年十二月免職になり閉門となっている。(「柳宮補任」という江戸幕府の任命記録によれば、幕府の寺社奉行に任命されたものは一九四人、うち、四人が召放閉門の処分をうけている。)

ともあれ、これらの措置をもって、禁断という成文法はないものの事実上禁制されたのである。これを不受不施派では「寛文の惣滅」という。

思うに、不受不施派を禁制としたのは、身延山二十八世法主日蓮と寺社奉行加賀爪直澄の二人に帰せられるであろう。勿論、何代にもわたる訴訟の結果ではあるが。

この後も、毎年のように身延山から幕府に不受不施派摘発の訴訟がだされているところを見ると、地下へ潜った形で、隠れ切支丹のように不受不施の信仰を守る人々がいたことをものがたっている。一般信徒は表面受派の寺の檀家を装い、暮夜ひそかに集まり、不受不施派の僧を囲んで信仰活動をおこなうのである。

そうした活動に対する訴えが度々出ていくということは、切支丹ほどは、幕府も取り締まりに熱は入らなかったことを窺わせる。しかし、訴人があれば逮捕せざるを得ず、明治九年に「不受不施派おかまいなし」と新政府が布告するまで、遠島、入牢などは続いた。解禁された時、この派の信者は数万人であったという。

私の父の実家もその内の一人である。父の家は、千葉県香取郡多古町に戦国時代から居住していたらしいが、この界限は岡山県と並んで不受不施派の多いところである。寛政六年、多古法難と呼ばれる取締まりがあり、僧侶一二名が捕縛されて一人流罪、十一名牢死、在家も七人が牢死している。

祖母の実家は多古町島、旧嶋村で一村挙げて不受不施派であった。捕吏が踏み込んで来

たとき、僧侶を逃がしたり匿う時間稼ぎのため、村内は道が迷路のようになっており、「行商人泣かせ」と言われたそうである。また、屋敷内に隠し部屋を設けてあった家もあった。(私はそれを見せてもらったことがあつた。天保九年、村で三二名が捕えられ、五人は江戸送りとなっている。)

島に正覚寺という寺があり、禁教時代は受派で解禁後不受不施派に復した。現在、無住で私の従兄など在家信徒が役員として寺を維持している。

(参考文献)

- 「身延山史」 身延山久遠寺
- 「不受不施派の源流と展開」 宮崎英修
- 「禁制不受不施派の研究」 同
- 「日蓮宗不受不施派の研究」 影山堯雄編
- 「日蓮宗不受不施派読史年表」 長光徳和・妻鹿淳子
- 「不受不施派殉教の歴史」 相葉 伸
- 「不受不施派農民の抵抗」 安藤精一
- 「日蓮教団全史 上」 立正大学編
- 「法華宗と町衆」 藤井 学
- 「忘れられた殉教者」 奈良本辰也